

資料

幼児の遊びにおける役割関係の理解

—おにごっこ場面の発達の検討—

田丸 尚美*

UNDERSTANDING ROLE RELATIONS AS DEMONSTRATED IN CHILDREN'S PLAY

— A developmental observation in Japanese tag game (ONIGOKKO) —

Naomi TAMARU

The development of role taking in a tag game was studied. Three play groups, each with three children, organized in each age class of 3-, 4-, 5-year-olds, were observed over four sessions by the author who participated each game in a day care center. Three aspects of children's behavior were evaluated: (a) "chasing-eluding" behaviors; (b) role exchange; and (c) understanding the "sphere of the game". The results showed that in the younger subject groups, the tagger often chased the eluders only when they began to escape, and the eluders frequently ran away even after the tagger began to chase them. The chaser's chasing behavior and catching behavior often occurred independently. It is believed that the children did not really understand the rules, whereas the older subjects could understand the rules of tag and continue the game by themselves. The acquisition of role taking in pretend play as a developmental prerequisite of understanding of the rule games was discussed.

Key words: role taking, tag game, preschool children.

問 題

幼児期後半より見られるルール遊びの1つであるおにごっこは、オニ役が逃げるコ役を追い、その一人をつかまえて役割を交代することで展開する。この遊びを成立させる役割行動および心理的機能として以下の2点が考えられる。

(1) 役割の保持

オニが役割を離れて追わなくなったり、コが途中で抜けたりすれば、遊びは崩壊する。自分が引き受けた役割を保持して役割行動を遂行することが必要である。

役割の保持は役割の表象によって支えられると考えられる。おにごっこを導入する際にオニの子に鬼のお面をつけさせて役割を意識させる実践はよく見られる。大内・芳賀(1980)は4歳児クラスの児におにごっこの

指導を段階的に行い、絵本「狼と7匹のこやぎ」を読み聞かせた後、狼とこやぎの役になった子どもそれぞれにお面をつけさせたところ、狼とこやぎのイメージをことばや身振りで表現しながら役割行動を取るようになる変化を観察している。佐藤(1982)は鬼をテーマとする紙芝居を読み聞かせ、低年齢でもおにごっこにおける役割遂行が容易になることを示した。読み聞かせる前は保育者が手をとってつかまえることを援助することの必要だった3歳児の中に、鬼の行動をイメージさせる言葉をかけると鬼の身振りをして追いかけてつかまえるようになる子がいることを観察している。

Elkonin(1964;1980)によれば、初期のルール遊びは「狼がうさぎを追う」など役割の属性によって役割の表象が形成されている。彼は役割遊びで子どもが引き受けた役割の背後に含まれるルールの理解をルール遊びの発生する基礎と考えた。

* 鳥取大学 (Tottori University)

(2)役割の交代

オニがオニ役に固執したりコがオニになるのを拒んだりすれば遊びは成立しない。相手と自分の役割をルールに基づいて交代して遊びを展開することが必要である。おにごっこを進行する上で、つかまえて役割を交代する場面で困難が生じやすいことが観察されている(例えば伊藤, 1983)。

役割の交代はルールに基づく役割関係の理解によって支えられると考えられるが、この点からおにごっこの成立についてなされた研究はほとんど見られない。わずかに先の大内・芳賀が、おにごっこの段階的指導の中で交代場面でシンボル(帽子)を手渡すという交代の手掛かりを与え、役割交代が容易に行われるようになることを観察した。一方保育の実践上はつかまえることを求められない追いかけっこがおにごっこの前段階的経験として位置づけられている(西頭, 1973; 城丸, 1980)。役割交代の成立を考える上で注目できる活動である。

追いかけっこは通常1対1のペアで行われ、次のような役割行動の特徴があげられる。①一方が追いかけると他方が逃げ、逆に一方が逃げ始めると他方が追いかける。交互に追ったり追われたりして関わり合う。双方の行動は誘発し合い、Mueller & Lucas (1975) が取り上げた、一方の行動と他方の行動が対になって初めて意味を持つ「相補的役割行動」にあたると思われる。②城丸が指摘するように、はっきりとつかまえたという状態を作り出す必要がなく、役割交代は時と場合によって変動する。③遊びの開始と終了はルールとしては不分明である。これに対するおにごっこの役割行動の特徴は、①オニがコ集団の誰か一人をつかまえるために追い、コはオニと自分だけでなくオニと他のコの関係にも目を向けながら逃げる。②オニがコをつかまえると役割を交代する。③遊びの開始は役決めという手続による。

本研究では、おにごっこにおける役割行動の特徴に対応する以下の3点を役割関係の理解をとらえる諸側面と仮定し、各々の発達的变化を仮説する。

①役割交渉(オニとコ双方の関わり方)の理解; 発達に伴い、互いに誘発し合う役割行動の相補的特徴が見られなくなり、追う・逃げる行動が眼前に展開されなくても役割交渉するようになる。

②役割交代(オニとコ双方の行動目標)の理解; 発達に伴い、役割交代のルールが明確になり、オニはつかまえるために追い、コはつかまるとスムーズに交代するようになる。

③遊戯活動の範囲の理解; 発達に伴い、他の遊びとの境界、参加者と非参加者の区別が明確になる。

以上を明らかにするために、おにごっこ場面を形成し、複数名の子どもによる役割間の相互作用を観察する。年少幼児においてはおにごっこを自然発生的に観察することは困難なため、大人が1名加わり参加観察を行う。子ども集団の規模は、役割交代の理解を見るために、オニが追うコ以外のコの参加者1名を加えた3名とする。大人の行動は、おにごっこのルールに即して原則的に統制する。また、同一被験児に反復して場面を設定し、複数回観察を重ねる。

目 的

おにごっこにおける子どもの役割行動を次の諸点から検討する。

1. 役割交渉 (a)オニの追う行動が存在しない場面(オニが屈んで10数える開始場面)におけるコの逃げる行動の出現のタイミング、(b)役割交代後のオニの追う行動の出現のし方。

2. 役割交代 (a)オニがコをつかまえる時の追う行動との連続性、(b)交代後新たにオニになった子の追う行動の出現の有無。

3. 遊戯活動の範囲 (a)おにごっこへの参入・離脱の手続の有無、(b)参加者と非参加者への態度の違い。

以上を通しておにごっこにおける子どもの役割関係の理解の過程を明らかにすることを目的とする。

方 法

デザイン 2, 3, 4歳児クラスの各年齢に、3名のグループを3チームずつ編成する。各グループに大人が1名ずつ加わり、おにごっこ場面を形成する。1グループにつき1回7~8分間の場面を週に1回ずつ計4回設け、全体で36回の場面を設定した。

被験児 公立保育園児

2歳児クラス10名** (2;8~3;4, 平均2;11)

3歳児クラス11名 (3;8~4;4, 平均4;0)

4歳児クラス11名 (4;8~5;6, 平均5;0)

本稿では、平均年齢によってそれぞれ3歳児, 4歳児, 5歳児と記述する。

手続 はじめに大人は3名の子どもに相対し、「おにごっこってどうやるの?」と質問する。子どもの答えを補足してFIG. 1に示したルールを言葉で確認する。

** 原則的に同一被験児に4回の場面設定を行ったが、病欠などのため一部にメンバーの変更があったため被験児は9名より多い。

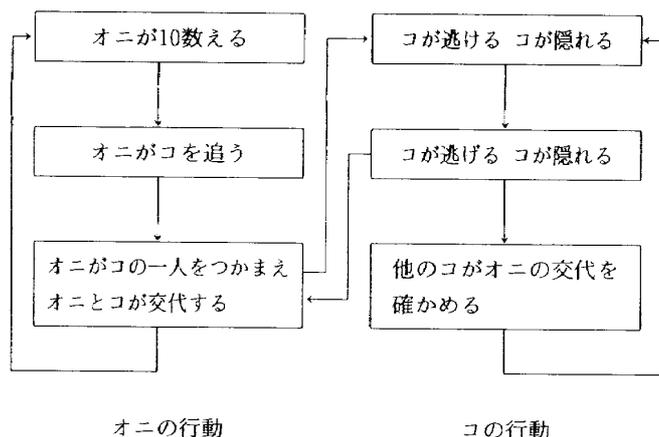


FIG. 1 おにごっこの構造

次にオニを決める。子どもからジャンケンの提案があればジャンケンに負けたものが、提案がなければ大人が最初のオニになる。

大人がオニの場合「つかまえるぞ」「オニだぞ」等言葉をかけつつ手をかざし、相手を換えながら追って、1回の場面で3名の子どもの最低1回はオニになるようにする。大人がコの場合、「つかまえてごらん」「オニさんこちら」等言葉をかけながらコ集団の一人として逃げる。オニが10数える開始場面ではコのいずれか1名が逃げ始めてから逃げる。

オニとコの交代場面では、大人は原則として「つかまった、〇〇ちゃんのおに」と言葉をかける。オニにつかまったコが逃げ続けたり他の遊びに抜けたりした場合は、大人が代わってオニになりおにごっこを続ける。

場所 おにごっこに参加しない他の2グループが固定遊具などで遊んでいる園庭で行う。2、3歳児クラスでは保育が1名この2グループに加わる。

記録 記録者がVTRを用いてオニの行動および相手のコの行動を中心におにごっこの展開を記録する。おにごっこ開始場面ではコの行動を記録した。またおにごっこに参加する大人が携帯用のカセットレコーダーを身につけ、子どもの音声記録を補足した。これらを基に、オニ・追う対象となるコ・それ以外のコの3者について、視線・運動・身振り・言語などの行動を記述した。

結 果

行動分類の観点 当該児の視線の方向および移動方向により分類した。視線がおにごっこの参加者に向けられ、相手との距離を縮める方向に移動するものを追う行動、逆に広げる方向に移動するものを逃げる行動

とする。参加者に視線が向けられながら移動方向が相手との関連上不明なもの(立ち止まる、相手と並んで走る等)は、役割不明と分類する。参加者に視線が向けられず園庭の固定遊具に向かう、他のグループに加わるなど、行動が他の遊びに向けられたものを離脱と分類する。また、参加者に視線が向けられ、手を用いて行われる身体接触行動(触れる、つかむ、たたくなど)をつかまえる行動とする。

分析の単位 オニがあるコをつかまえてオニとコの役割が代わったところで役割交代と認定する。役割交代で区切られる、オニがコに対して追う行動・つかまえる行動を取る過程を1つの事例と考え、事例を基に分析した。また問題とする行動の現れた場面の頻数をケースとして記述を分ける。

今回の観察では3歳児のべ57例、4歳児のべ88例、5歳児のべ87例の事例が得られた。そのうち追う行動の出現した事例は、TABLE 1に示すように、3歳児42例(74%) 4歳児79例(90%) 5歳児86例(99%)である。

TABLE 1 追う行動の出現の有無による事例の分類

被験児	追う行動出現せず		追う行動 の出現	その他 計
	他の遊び へ離脱	コとして 役割不明 逃げ続ける行動		
3歳児	7(.12)	4(.07)	42(.74)	57
4歳児	2(.02)	5(.06)	79(.90)	88
5歳児	0(.00)	0(.00)	86(.99)	87

Note; 表中の数字はのべ事例数、()内はのべ事例総数に対する比率を示す。

1. 役割交渉

(a) コの逃げる行動の出現の仕方

おにごっこ開始場面におけるオニが10数える行動の以前・最中・以後という3つの時点との関連で、逃げる行動がいつ現れたかを分類する。「以前」はオニが決定した時にコが走り出すもので、数える行動出現以前に逃げる行動が現れるものである。「最中」はオニが追う行動そのものではなくその準備となる行動をしている間に逃げる行動が現れるものである。「以後」はオニが10数え終わり手をかざす・走り出すなど追う行動をとった後に逃げる行動が現れるものである。

TABLE 2より、数え終わって追う行動が出現した後に逃げ始める子どもののべ人数比は、3歳児89%、4歳児3%、5歳児では観察されなかった。10数えている最中に逃げ始めるのは4歳児に多く(66%)、3歳児5%、5歳児14%であった。数える行動出現以前に逃げ始めるのは、3歳児では観察されず、4歳児20%、

5歳児は79%と比率が高かった。

(b) 交代後のオニの追う行動の出現の仕方

TABLE 3 に示すように、交代後に追う行動が出現した事例の中に、追う行動が出現する前にコ集団を見たまま10秒間前後立つ、屈むなど役割不明行動の介在するものがあり、4歳児の第1回の50%、第2回の24%の事例に見られた。3歳児には見られず、4歳児の第3・4回、5歳児にもほとんど見られない。

次に役割不明行動の介在なしに追う行動の出現した事例について、追う相手との関連により分類する (TABLE 4)。

TABLE 2 逃げる行動の出現時点による分類

被験児	オニが10 数えた後	オニが10 数える間	オニが10 数える前	その他	計
3歳児	33(.89)	2(.05)	0(.00)	2(.05)	37
4歳児	1(.03)	23(.66)	7(.20)	4(.11)	35
5歳児	0(.00)	4(.14)	23(.79)	2(.07)	29

Note: 1) 表中の数字はのべ人数, ()内はのべ人数比である。
2) 人数合計は子どもがオニになる場合があるため年齢により異なる。

TABLE 3 役割不明行動の介在による追う行動の出現のしかたの分類

被験児	回数	介在あり	介在なし	介在不明	各回計	総計
3歳児	1回目	0(.00)	8(1.00)	0(.00)	8(1.00)	42
	2回目	0(.00)	10(1.00)	0(.00)	10(1.00)	
	3回目	0(.00)	14(.94)	1(.07)	15(1.00)	
	4回目	0(.00)	8(.89)	1(.11)	9(1.00)	
4歳児	1回目	5(.50)	5(.50)	0(.00)	10(1.00)	79
	2回目	5(.24)	15(.71)	1(.05)	21(1.00)	
	3回目	1(.04)	24(.93)	1(.04)	26(1.00)	
	4回目	0(.00)	22(1.00)	0(.00)	22(1.00)	
5歳児	1回目	1(.05)	20(.91)	1(.05)	22(1.00)	86
	2回目	0(.00)	21(1.00)	0(.00)	21(1.00)	
	3回目	0(.00)	25(.96)	1(.04)	26(1.00)	
	4回目	0(.00)	16(.94)	1(.06)	17(1.00)	

Note: 追う行動の出現した事例について分類し、のべ事例数と各回ののべ事例総数に対する比率を示す。

TABLE 4 相手との関係による追う行動の出現のしかたの分類

被験児	相手に向かって走り出す			相手を 想定して 走り出す	その他 計
	大人に向う	子に向う	小 計		
3歳児	27(.68)	9(.23)	36(.90)	0(.00)	4(.10) 40
4歳児	23(.35)	23(.35)	46(.70)	15(.23)	5(.08) 66
5歳児	24(.29)	24(.29)	48(.59)	28(.34)	6(.07) 82

Note: 役割不明行動の介在なしに追う行動の出現した事例について分類し、のべ事例数とのべ事例総数に対する比率を示す。

相手に向かって走り出す事例は3歳児の90%であり、大人に向かう率が高い (68%)。4, 5歳児になると大人、子どもの相手の差は見られず、相手に向かって走り出す事例の割合が減る一方、相手を想定して走り出す事例が見られる。周囲を見回す、物陰をのぞくなどコを探す行動が観察された。

2. 役割交代

(a) つかまえる行動の分類

オニのつかまえる行動を追う行動との連なりにより分類する。立ち止まる、相手と顔を見合わせるなどの行動がはさまれ、相手の誘発的働きかけ (例「つかまえてごらん」と手を出す、オニの前に立ち止まる) によってつかまえる行動が現れるかどうかを検討した。

TABLE 5 に示すように、誘発されてつかまえる事例は3歳児に比率が高く (60%)、第1, 2回はほとんどの事例がこれにあたる。4歳児にも見られるが (6%)、第3, 4回には1例のみであった。5歳児には最初から見られない。一方、追う行動から連なってつかまえる事例は4・5歳児の大部分にみられ、3歳児では第3・4回の半数の事例に見られる。

(b) 交代後の追う行動の出現の有無

TABLE 1 に示したように、交代後追う行動の出現しない事例は3歳児に14例 (25%)、4歳児に8例 (9%) 見

TABLE 5 つかまえる行動による事例の分類

被験児	誘発的働きかけの媒介					追う行動からの連続					その他 計
	1回目	2回目	3回目	4回目	小 計	1回目	2回目	3回目	4回目	小 計	
3歳児	6(.14)	9(.21)	7(.17)	3(.07)	25(.60)	1(.02)	1(.02)	6(.14)	6(.14)	14(.33)	3(.07) 42
4歳児	1(.01)	3(.04)	1(.01)	0(.00)	5(.06)	9(.11)	16(.20)	15(.19)	16(.20)	56(.71)	18(.23) 79
5歳児	0(.00)	0(.00)	0(.00)	0(.00)	0(.00)	22(.26)	21(.24)	25(.29)	16(.19)	84(.98)	2(.02) 86

Note: 1) 追う行動の出現した事例について分類し、のべ事例数とのべ事例総数に対する比率を示す。
2) 任意にとり出した資料の2者間の分類一致率は91%である。
3) 4歳児に「その他」の事例が多いのは、コによる役割交代が含まれるためである (本文参照)。

られた。5歳児ではほぼ全ての事例で追う行動が観察された。

3歳児では他の遊びに離脱する(7例, 12%), 交代が起こらずコとして逃げる行動をとる(3例, 5%)事例が見られた。これらは4歳児には3例(3%)見られ、4歳児のその他の5例では役割不明行動が観察された。

3. 遊戯活動の範囲

(a) おにごっこへの参加・離脱の手続

交代後オニとしての追う行動をとらずに他の遊びにそのまま離脱する事例数はTABLE 1に示されている。3歳児に7例、4歳児に2例見られ、5歳児には観察されない。「入レテ」「ヤメタ」と宣言する行動は4、5歳児に観察される。

(b) 参加者と非参加者への態度

参加者から非参加者への働きかけとしてオニが非参加者をつかまえる行動が3歳児に2ケース見られ、4・5歳児では観察されていない。5歳児では大人に尋ねる(例. オニが非参加者とぶつかって立ち止まり, 大人に「先生, マサカズ君ヤッテルノ? マサカズ君」と尋ねる), 非参加者と互いに確認し合う行動がみられた。

非参加者から参加者への働きかけとして、第1にコ集団に加入して逃げる・隠れる行動が3歳児に11ケース、4・5歳児に3ケース見られた。5歳児では参加者と互いに確認し合う行動(例. オニAがコBに向かって走ってくると、Bの横に立って見ていたCがAに「アタシ入レテモラッテナイモン」と言う)が見られた。第2に、オニに対して攻撃的態度をとる行動が3歳児に3ケース、4歳児に1ケース見られる(例. 大人のオニが「つかまえるぞう」とコに手をかざすのを見ていた非参加者A, Bが、「ヤメロー」「ヤメロー」と手を挙げてオニに向かって走る)。第3に参加者に対する協力的・妨害的行動が5歳児に頻繁にみられた。オニに対して「アソコニイルヨ」とコの隠れ場所を教えたり(11ケース), 「ココニハイナイヨ」とコを隠したりする(2ケース)。コに対しては、追いかけようとするオニの前に立って手を広げてコを逃がしたり(2ケース), コの両腕を押えて放さずにオニにつかまえさせたりする(1ケース)。

考 察

1. 各年齢の特徴的行動

各年齢に特徴的に現れる行動をまとめ考察を加える。

3歳児では追う・逃げるという交渉行動の相補的特徴が明らかに見られた。オニが追い始めるまで逃げ出さないコがのべ9割に上り、役割交代後にオニが追い始める場合の9割は逃げる相手に向かっている。相手

として大人に向かう割合が高いのは、大人は明白に逃げる行動を取るためと考えられる。

回を重ねるうちに半数の事例で誘発的働きかけがなくてもつかまえるようになるものの、つかまえるために追うというつながりが弱く、つかまえても役割交代が行われない場合も見られた。オニが1度コに抱き着く、タッチするなどした後も引き続き追う行動が取られるものが3歳児に5ケース、4歳児にも1ケース見られた。つかまえる行動が役割交代の意味を成さないものと考えられる。また、コがオニに抱き着く行動が3歳児に頻出した(11ケース)。手をかざし「オニー」と言うAを見ていたコBがAに両手で抱き着き、Bの横にいたコCもAに抱き着くなどである。コがコに抱き着く行動も5ケース観察された。おにごっここの役割関係外の抱き着きそのものと考えられる。今回の資料では、3歳児にはルールとしての役割関係の理解は難しく、おにごっことしての展開は困難であると考えられる。

4歳児では、つかまえるために追うというつながりが明確になってくるものの、コがオニをつかんで「ツカマエタ」という行動が10ケース観察され、コがオニに「今度アタシガオニニナル」と言うケースもみられた。これらは、つかまえる行動が役割交代のルールとして意味づけられる上での困難を示していると考えられる。

交代後にほとんどの事例で新たにオニになった子が追う行動をとるが、第1・2回に役割不明行動の介在するものがよく見られた。役割不明行動の介在は3歳児には見られない。交渉行動が互いに誘発し合うものなら、逃げる相手に誘われて追い始めると考えられる。4歳児に特徴的にみられる役割不明行動は、ルールによってコとの関係が規定されたオニの役割を新たに自分のものとして引き受ける上での困難を示していると考えられる。自分がオニになりたいという交代上の混乱も、コに対して自分がオニの役割を取ることが理解される過程の過渡的行動と考えられる。

5歳児では交代場面の混乱はほとんど見られず、オニはつかまえるために追い、つかまるとコがオニに交代して追い始める。追い始める場合も役割不明行動の介在する事例はほとんどなく、4歳児よりも逃げる相手を想定して追い始める割合が高くなる。これは同時に、オニが決まって、まだ追い始めない段階で逃げ始めるコが多く、オニから隠れるという状況が作られるためと考えられる。いずれも自分の引き受けた役割を相手に関係づけて理解していることを示すと考えられ

る。また、コAがオニBを「オニサンコチラ」と拍手して誘ううちにBの手に触れると、BがAに「ツイタ」と言い、AがBを見て立っているとBが再びAの手にタッチして「ツイタヨ」と言う等、体に触れることが交代のルールとして厳格に処されたり、オニAがコBの頭を叩いてつかまえると、Bが「頭ツイチャイケナイダヨ。手ダケ」と手を見せながら逃げてしまう等、インチキに用いられたりするケースが見られた。つかまえる行動を交代のルールとして応用し、遊び手として関わっているためと考えられる。

2. 役割関係の理解の諸側面

本研究で得られたおにごっこにおける役割行動の年齢的特徴から、役割関係の理解について以下のような発達的变化の方向が考えられる。

役割交渉の理解 オニの追う行動が眼前に展開されなくてもコが逃げ始めるようになり、逃げる相手がいなくても想定して探しながらオニが追い始めるようになる。交渉行動の相補性が見られなくなり、ルールに即してオニ・コ双方の役割行動として自立したものとなる変化が確認された。

役割交代の理解 オニはつかまえるために追い、交代後はコがスムーズにオニに代わるようになる。つかまえる行動が交代のルールとして理解され、安定して働くようになる変化が確認された。

遊戯活動の範囲の理解 他の遊びとの境界が明確となり、遊びの参加・離脱の手續がとられたり、参加者と非参加者に異なる態度をとるようになる。ルールに基づく役割関係を結んだ遊戯活動を区別するようになる変化が確認された。

3. 役割表象のはたらきと役割交代

3歳児では、追う行動に「鬼」を表わす身振り(第2指を鬼の角のように頭に立てる、指で口を横に拡げる等)の伴うものが42例中36例で観察された。「鬼」という役割の表象によって役割行動が支えられていると考えられ、Elkonin (1964) の説を支持している。佐藤他が示したように、役割表象を明確にする働きかけによってオニのつかまえる行動がとりやすくなることも確認されている。

しかし、中にはつかまえるためにコを追うというより、「ワー」「オバケー」と脅かすことが主体となりつかまえる行動をとらないものが8例(10名中4名)に観察された。身振りをとって行動するうちに、おにごっこのオニとして交代するためにつかまえるのではなく、子を脅かす「鬼」を表わす行動が取られたと考えられる。「鬼」の表象が役割を交代するための手續を妨げる

場合があることに注目したい。

Elkonin がルール遊びを準備するものと考えた役割遊びでは、一旦引き受けた役割は原則的に固定されるのに対し、おにごっこの役割はつかまえるという交代の手續によって代わっていく。その点では、活動の構造が異なる。つかまえる行動が交代の手續として理解される上で、役割遊びからの連続性とは異なる視点からおにごっこの成立を検討する必要がある。Garvey, C. (1977) は、ルールのある遊びは乳児期からの遊びの経験に基づいていると考え、「子どもたちが大人と相互作用し合ううちに学ぶ反復的かつ予測可能な行動パターン」にさかのぼる必要を指摘する。おにごっこの役割行動を検討する上で、本稿で取り上げた追いかけておにごっこにおける行動パターンに着目したアプローチの意義が認められよう。

4. 今後の課題

今回はおにごっこにおける役割関係の理解を役割行動の3つの側面から分析し、各側面の発達的变化を示した。事例に基づいて分析したが、回を重ねることで個々人における行動がどう変化したかを検討する課題が残されている。また、参加観察する大人は遊び手として関わりおにごっこの進行を図ったが、子どもへの指導としての働きかけは特に意図しなかった。追う、逃げるという交渉行動をことばや身振りで表現する、役割の交代をことばで確認するなどルールに即して行動を原則的に統制したが、大人の行動が子どもに対する演示の効果を持ったことも考えられる。大人の働きかけの及ぼす効果について分析し、形成実験的アプローチを検討していくことも今後の課題である。

また、今回の分析は役割交代の成立を中心になされたため、オニが追う過程やコが逃げる過程が取り上げられていない。例えば、5歳児に観察された、逃げるコがオニに誘いかけてわざと近づいたり、オニがつかまえるふりをしてそらせたりするなど、双方の関わり合いの出現の仕方もおにごっこという遊びの枠組みの中で検討する必要がある。また、3、4歳児の中に、追う過程で相手のコを換えない事例が観察されたが、おにごっこの成立初期に、オニになった子が特定のコ(大人、親しい友等)をよく追うことが指摘されている(勅使, 1981)。Elkonin (1964) は遊びに参加する子どもたちの相互関係として、遊戯的關係(ままごとならば、お母さんと子ども等)とリアルな関係(AちゃんとB君等)という2つの形式をとりあげたが、特定のコを追うのは日常生活における関係を遊戯場面に持ち込み、それを支えに役割関係を取るために現れる現象と考えら

れる。役割関係の理解の過程でその2つの関係の区別がどんな役割を果たすのか検討する必要がある。

また、今回の分析では、追いかっこのにおける交渉行動を「相補的役割行動」ととらえ、追う、逃げる行動が眼前で対応し合うかどうかを問題にしたが、その特徴についても詳細な検討が必要である。四つ這いをし始めた頃から大人が追うのを期待して振り返りながら逃げるように這い去る行動が観察されている(やまだ, 1989)。追いかっこの発生初期の双方のやり取りやその後の変化、大人が関わる場合と子どもどうして行われる場合などの活動形態の違い、追い手と逃げ手の交代の仕方などを取り上げ、追いかっこの行動を成立させている心理機制について考える課題がある。例えば河崎(1985)は追い手と逃げ手の情動的交流を仮定している。また、役割の表象が果たす働きについても、追いかっこの役割行動を支える心理機制と関連づけて調べることが必要である。3歳児に特徴的に見られた非参加者の関わり(コ集団に加わって逃げる、オニに攻撃的態度を取る)もこれと関連づけて分析する必要がある。

本研究では実験的なおにごっこ場面を設けたが、実践上の若干の示唆も得られたと思われる。3歳児と4・5歳児のおにごっこに質的相違がみられた。3歳児にとってはつかまえる行動に必然性がないために追う—逃げるという相補的やりとりを楽しむことが重要である。やりとりにイメージを与えて楽しみを増す「鬼」「狼」等の役割の導入は役割保持をスムーズにさせる作用があろう。

つかまえる行動をどのように導入するかは実践的課題でもある。伊藤はおにごっこの前に「おおかみさん今何時」などのわらべ歌遊びを導入した実践に触れ、オニ交代の時点で遊びが停止し新しいオニが誰になったか全員で確認しやすい形態を持つ点を評価する。神田(1984)は、オニの合図でコが安全地帯間を移動するうちにオニがコをつかまえる「移動オニ」は追い—逃げの目標の維持や役割交代を支えやすいため3歳児クラスのおにごっこの導入にふさわしいと考える。おにごっこの成立には様々な構造の遊びが関わる。実践の

見通しを明らかにする上で、関連する遊びが子どもの役割行動のどのような側面の発達の条件になっているか調べる必要がある。

引用文献

- エリコニン, D.B. 駒林邦男(訳) 1964 ソビエト児童心理学 明治図書
- Elkonin, D.B. 1980 *Psychologie des Spiels*. Berlin : Volk und Wissen Volkseigener Verlag.
- Garvey, C. 高橋たまき(訳) 1977 「ごっこ」の構造 サイエンス社
- 伊藤良子 1983 ルール遊び 河崎道夫編著 子どもの遊びと発達 ひとなる書房
- 神田英雄 1984 「泣き」に注目したオニごっこの成立過程の考察 心理科学, 8 (1), 9—23.
- 河崎道夫 1985 遊び心をつかんだ指導 現代と保育 別冊第1号 ひとなる書房
- Mueller, E., & Lucas, T. 1975 A developmental analysis of peer interaction among toddlers. In M. Lewis, & L.A. Rosenblum (Ed.). *The origins of behavior : Friendship and peer relations*. New York : Wiley. 223—257.
- 大内由美・芳賀久美子 1980 遊びの発達過程—役割遊びからルール遊びへの移行 宮城教育大学卒業論文
- 西頭三雄児 1973 幼児期における遊びの教育的構造 愛知教育大学研究報告22 (第4部・教育科学編) 135—148.
- 佐藤弘子 1982 幼児の遊びの発達—鬼ごっこの習得過程に見られる心的発達 東北大学修士論文
- 城丸章夫 1981 幼児のあそびと仕事 草土文化
- 勅使千鶴 1981 幼児期の遊びの指導 土方弘子・勅使千鶴(編) 乳幼児の遊び ミネルヴァ書房 29—52.
- やまだようこ 1987 ことばの前のことば 新曜社
(1990年6月14日受稿)